身辺雑記。

石榴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
身辺雑記。

【Ｎコード】
Ｎ３２３６Ｑ

【作者名】
石榴

【あらすじ】
とある世界の少女のとある日常の雑記。

○月×日
イタズラで幼児にされました。
えぇ。大丈夫です。
元に戻る方法は分かってますから問題ありません。
負けません。
えぇ。負けませんとも！

……何でアンタ精霊の癖に私にだけイタズラすんのよぅ〜！

基本三人称。
コメディ調ほのぼのです。

イタズラの産物。（前書き）

最初のオハナシ。

イタズラの産物。

「っきゃあぁぁぁ～」

不意に隣室から届いた悲鳴に、ライトは慌てて立ち上がり、駆け出した。
隣に座っていたフォルテも同時に動きだした気配を感じたが、振り返る事なく隣室に急ぐ。

「リィ！」

ライトは叫ぶように名を呼びながら、ぶち壊す勢いで扉を開けた。
二人とも勢い良く部屋の中へ雪崩れ込み、素早く右手窓側の机の方へ視線を向けた。
そこに居る筈の。
悲鳴をあげた少女を視界に捉える為に。

「…リィ？」
「何が、あった？」

殆ど同時に飛び込んだ少年二人は、少女を見た瞬間、動きを止めた。
程度の差こそあれ、瞳を見開き驚きを素直に顔に出した二人に、少女は半泣きの表情で口を開いた。
「シーリンにイタズラされたぁ～」
ふにゃぁ～と途方にくれた仔猫のように哀れな泣き声がリィナの口からこぼれた。
それは幼い容貌と相まって大変に庇護欲をそそる可愛いらしい風情だった。
…例え彼女が服の海に溺れていようとも。

身に合わない大きすぎる服の中に頭以外を埋もれさせ、涙目で見上げるリィナの姿に、踏みしめた堅い筈の床がぐにゃりと歪んだような気がして、ライトはぐらりと上体が傾いだ。

「効果の持続時間は？」

フォルテが呆れたような口調で端的に質問すると、リィナは少しだけ悔しそうな表情を浮かべながら口を開いた。

「わかんない。風起こされて色々混ざったみたいだし…目、開けてられなかったもん」

想像つかないよ

と拗ねたようにぽつりと呟いた。

ライトは、小さなため息を一つつくとリィナに歩みより、彼女の両脇に手を入れ持ち上げた。

だぶだぶのワイシャツ以外の服はリィナの身体から離れ、その場に脱け殻のように残された。

服の海から引き揚げられたリィナは推定４・５歳位の姿をしていた。

「懐かしいな」

リィナを吊り上げたままライトが可笑しそうに言うと、リィナは不機嫌そうにライトを睨んだ。

「懐かしくないもん！てか腕痛い」

「ああ、悪い」

仔犬に吠えられた、というような笑い混じりの謝罪を言うと、ライ

トは一旦リィナを床に降ろした。
そして自分の上着を脱いで、それでリィナをくるむと、両膝裏に右腕を回して掬い上げた。
一連の動作に無駄は無く、とても素早い行動だった。

リィナは益々眉根を不快そうに寄せたが、何も言わず、渋々安定の為に自分の手をライトの肩に置いた。
自分が何か言ってもライトは何処吹く風、と聞き流して絶対に降ろさないと分かっている。
だったら言うだけムダなだけだ。
…腹立ちまでは押さえられないけれど。

膨れっ面をしたリィナと、頓着せず彼女を見て機嫌良さげに笑うライトの様子に、フォルテは何時もの事だとこちらも頓着せずに二人に歩みよった。

「それで？これからどうする？」

フォルテの無駄な言葉の無い、簡潔で建設的な質問に、ライトはそちらに顔を向け、お前らしいな、と呟いた。
口数少なく、表情も然程大きく変わらないフォルテは、周りから遠巻きに見られる事が多い。
リィナはフォルテと普通に会話するが、ライトが彼と仲が良かったから近くにいたリィナも慣れただけで、そうでなければ友人付き合いなどしていなかっただろう。

割合に整った容姿と、端的ながらも的確な言葉から伺える有能さ故に、女子の間で密かに人気が高い。
口数が少ないのと、気軽に声をかけられるような雰囲気では無い為、人気の高さを彼は知らないけれど。

対してライトは親しみやすい雰囲気を持ち、男女問わず顔が広い。
リィナに対するシスコンっぷりが若干マイナスポイントにはなるが、優しい顔立ちと態度に、こちらも中々の倍率の高さとなっている。

二人が傍に居ると視線が怖いんだよなぁ～と暢気に思いながらリィナは口を開いた。

「とりあえず2・3日は様子を見るよ。できれば薬に頼らない方が良いし。頼るなら間隔開けないとだしね。身体が戻らなければ薬を調合するよ」

材料は有るし、調合する腕もある。
まだ身分は学生だったが、リィナの薬師としての知識と腕は折り紙付だ。
リィナ自身、薬師としての研鑽を怠らず、オリジナルの調合を良く実験しているし、知識の吸収にも貪欲だ。
だから調合実験中にイタズラされ、効果を予測出来ない事を素直に悔しいと、思う。
実験の為に、机上には様々な薬草や、鉱物や、器具が乗っていたのだが、シーリンのイタズラによって床に散乱していた。
これを片付けるのかと思うと、些か(いささか)どころではなくゲンナリする位の散らかりように少しばかり腹も立つ。

ついでに今の縮んだ体型に、幼い頃の自分を思い出してにやついているライトにも腹が立つ。
リィナは自分を子供抱っこしたままのライトの頬を八つ当たりも込めてぎゅっとつねってやった。

「痛いよ、リィ」

くすくすと笑いながら、機嫌の良さそうな声でそう言うライトを無言で数秒睨み付けてから、リィナはぷいっと膨れっ面でそっぽを向いた。

「あれ、ご機嫌を損ねちゃったかな、僕のお姫さま」

困ったなぁ。どうしようか。

大して困ってないのが丸分かりの口調でそう言いながらう、ライトはフォルテに視線を向けた。

フォルテは自業自得だ、と視線で返してから口を開いた。

「シーリンか。珍しいな」

「え？」

フォルテの言葉に、意味の分からないリィナは、きょとん、とした表情で問いかけた。

そんなリィナに視線を向けて、フォルテは口を開いた。

「シーリンなんて先ず見かけないだろ」

「え？」

「リィは可愛いからね、シーリンだってリィの魅力には勝てないんだよ」

「はぁ？！」

至極真面目な顔でそう言いきったライトの言葉にリィナは思わずすっとんきょうな叫びを上げた。

「何バカな事言ってるのよ！」

「バカな事じゃないよ。リィの可愛さはシーリンにも有効だという、素晴らしい事実を述べてるんじゃないか」

「それがバカな事でしょうが！」

この兄バカ～っとリィナが力一杯ツッコミをいれると、愉快そうにライトはあはは、と笑い声をあげた。

フォルテは、そのやり取りに無言で呆れた視線を返した。

フォルテの冷ややかな視線に、リィナが自分もその対象なの！？と慌てて問いかけると、フォルテは当然、とばかりに頷き、リィナはがっくりとライトの肩に顔を埋めた。

リィナが反応を返すからライトが面白がって更にちょっかいを出すのだから、適当に流せば良いのだ、とフォルテは思う。

最も、それが出来ないのがリィナだし、流せるような性格なら自分は彼女に心を許すような事はしなかっただろう、とも思いはするが。

それはそれ、これはこれ、だ。

「うぅぅ～ライトのばかぁ～」

「ひどい言われようだなぁ」

フォルテは相変わらず冷ややかな呆れを含んだ視線のままだったが、ライトは一切頓着しない。
顔を埋めたまま、くぐもった声で唸るリィナを楽しそうに見つめたまま扉に向かって歩き出した。

「とにかくその格好じゃ風邪を引きそうだから、着替えておいで」
「…うん。わかった。…縮んじゃったのは良くないけど、此処が家で良かった」
「そうだね。こんな可愛いリィの姿を見せるなんて考えたら、両目抉るだけでも生ぬるいよね」
「生ぬるくないわよ！十分酷いわよ！」
「えー、リィと同じ空間に存在してるってだけで許せないでしょ」
「どんな独裁者よ！」

ライトの言葉にきゃんきゃんと噛みつくリィナを更に煽りながら扉を開けて出ていくライトは、一瞬だけ振り返り、自分を見つめる訝るような視線にからかうような笑みを返して扉を閉めた。
後に残されたフォルテは、シーリンの悪戯によって粉々に砕け散った器具の破片をじっと見つめながら、ぽつり、と呟いた。

「本当に、珍しい」

※※※

「ねぇ、ライト。いい加減降ろして」
「はいはい、お姫さま。転ばないでね？」
「転ばないわ…っぷぎゃっ！」

丁寧に下ろされたリィナは、憤然と抗議しながら歩き出そうとして、見事に上着の裾に躓(つまず)いてすっ転んだ。
ライトがそれを見て盛大に笑いながら、優しくリィナを抱き起こした。
そしてそのまま先程のようにリィナを自分の腕に抱えた。

「うぅ〜」

リィナは、鼻を押さえて不満そうに呻きながらライトを睨み上げる。
笑われたことを抗議したいが、自分の失態の手前言葉を飲み込んで、視線だけで不満を表明する。
瞳が痛みと羞恥心で潤んでいて、幼児の外見と相まって大層愛らしい様子だった。
ライトは腕に抱えあげたリィナにざっと視線を走らせながら、問いかけた。

「怪我はなさそうだけど、痛いとこはあるかい、リィ？」

ライトの問いかけに、リィナは膨れっ面をして無言で首を横にふっ

た。
いまだ笑いを含んだ声音でも、優しく本心から気遣う様子にリィナは嬉しそうなくすぐったそうな表情を一瞬だけ浮かべたが、直ぐに膨れっ面を作った。
ライトを睨みつけていた手前、素直になれないようで、ライトは内心でこっそりと笑った。

「本当にリィは可愛いよね」

ライトは機嫌の良さそうな声でそう言いながら、たどり着いた部屋の前で抱えていたリィナをそっと降ろした。

「さぁ、着替えておいで」
「…うん」

リィナを促すと同時に上着を脱がせてやり、ライトは扉を片手で押さえてリィナを中に促した。
扉の向こうに小さな背中が消えると、ライトは顔の笑みを消して小さく呟いた。

「さて。どうしようかな」

イタズラの産物。（後書き）

続きます。

のーさんきゅーだよ。（前書き）

続きを書いてみました。

のーさんきゅーだよ。

何、この状況？
過保護にも程がない？
てかこれだけいるんなら誰か一人位助けなさいよ！？

比喩でもなんでもなく全方向から向けられる視線に、リィナは現実逃避した頭の中でツッコミを入れた。

薬の調合実験中に精霊（シーリン）にイタズラされて縮んだ体型は、やっぱり一晩経っても戻らなかった。
それはまぁ、仕方ない。
元々余り期待してなかったし。

でも。
とリィナは思う。

でも。
何でライトに子供抱っこされて学院の廊下を歩いているわけ！？
しかも何よ、この注目度！？
そりゃ昨日まで普通だった少女がいきなり幼児の姿で現れれば注目の的になるのは必須…とも言えるが、
ここは腐っても『学院』。
薬学やら、魔学やら、気学やら…色々な授業や実験が繰り広げられる学問の場だ。
当然、知識は有るのだから高々若返った位でここまで注目されるものなのか？とリィナは疑問を覚える。

これはあれ？あれなの？
自分の姿に関係なく『ライトが』リィナ（妹）といえど女性を抱きあげているからの反応！？

リィナは暴走した思考の末に、ぶるり、と身震いした。

リィナは身体が戻るまで学院は休むつもりだった。
単位も出席も足りてるし、ノートなら後で借りれば良い。
別に数日休んでも何の問題も無いし、寧ろ休めば自宅で色々実験出来る分有意義だとすら思っていたのに！

自分を抱っこしながらご満悦そうに歩くライトを睨み付けながらリィナは心の中で絶叫していた。

この（私限定）ＫＹのバカ兄め！！

今朝も寝起きの悪いリィナはライトに起こされた。
それは別に普通で、何時もの日常の風景の筈だった。

問題は目を開けたら、満面の笑みを浮かべたライトのドアップがあった事だ。
思わず反射的に顔面に拳をお見舞いしても許されるだろう。
正当防衛だ。

悔しいのは幼児の力では殆ど痛みは無かったらしい事と、自分の拳の方が痛かった事だ。
全くもって理不尽だ。

更に理不尽なのがライトの態度だ。

ベッドから食堂に向かうのも、身支度に家の中をうろつくのも全てリィナは抱っこされて移動した。
自分で歩けると全身で暴れて主張したにも関わらず、だ。

「リィナはお転婆だなぁ」

とか明後日の発言を笑顔で言ってのけて、リィナの抵抗をものともせず封じ込めて己のしたいように振舞いやがった…いや、もとい。振る舞った。

年令や性別による体格差、力の差があるから勝ち目がないのを頭で解っていてもリィナは腹が立つのを抑える事が出来なかった。

「ちょっと！いい加減に降ろしてよ！私は赤ちゃんじゃないのよ！」

ライトの耳を引っ張って、その耳元で盛大に叫んでやった。
流石のライトも顔をしかめてリィナに不満気な表情を向けた。
…それでもリィナを手放さないのは、天晴れと言おうかしつこいと言おうか…。

「耳元で叫んだら耳が痛いよ？でも朝から元気なのは良い事だ。リィナは良い子だね」

ライトの的外れなのほほん発言に、リィナは頭の何処かでぷちり、と何かが切れた音を聞いた気がした。

「降ろせっつってんでしょ～！このバカ兄～！！」

リィナは魂からの叫びを上げて全身全霊で力の限りライトの腕を退けるべく抗った。

結局。
結局体力の無いリィナはものの5分もかからず力尽き、無駄に運動神経有る上に鍛えてる人間の腕はミリ単位すら動くことは無かった。
そうして「一人にするわけにいかない」と良く分からない理屈を述べられ、今に至る。

イタイ愛の域に達しつつある気がしてならないライトのシスコンっぷりに、リィナは最早ため息をつく事しか出来なかった。
鬱陶しい事、この上ない。

のーさんきゅーだよ。（後書き）

続きます。

アホか～！！（前書き）

間が空いてすみませんm（＿＿）m
短いですが続きをＵＰしました！

アホか〜！！

「可愛らしい光景の筈なのに…」

とある第三者がぽつりと呟いた言葉に、そこに居る当事者を除いた全員が胸の内で激しく同意した。

ちょこんと、という形容詞がまさにぴったりな姿で座っている幼児の頭はかろうじて机の上に出ており、足は床の遥か上にあった。

時折机の上に広げられた資料を、机の縁を小さな手で掴んで精一杯伸び上がって見ようとする仕草が見られ、小動物のような幼い姿は、大層愛らしい。

話しかけられると大きく丸い瞳でじぃっと見上げ、相手の保護欲をこれでもかと掻き立てる。

事実、リィナに目を止めた教師が説明を求め、ライトが説明している間じっとリィナに見上げられた教師やそれを見ていた周囲が頬を赤らめて狼狽えた。

それに気付いたライトが教師とそして男子のみに向けて笑顔で威圧してからは、視線は向けられても決して彼等に近づく猛者はいなかった。

その威圧をリィナに気づかれる事なく、けれどもリィナ以外には全て気付かれるように仕向ける辺り、流石、と言えなくもない。

とにかく幼女の姿は愛らしかった。

…彼女と椅子の間に居るものを視界に納めなければ。

いや。何も知らない人間が見たらそれ込みでも可愛らしい光景と捉えられる、だろう。
造作は良い方なのだから。

見るだけ、なら文句なく鑑賞出来るレベルなのだ。
愛らしい幼女を自らの膝の上に抱き上げ、とろけそうな程優しい笑みを浮かべる有望株な少年の姿は。

「リィ抱っこしてるとちょっと暑いね」
「子供体温なんだから仕方ないでしょう！っていうか放せば良いでしょ！？」
「丁度良いって言ってるんだよ。気温寒いし」
「人を暖房代わりにしないでよ！放せ！」
「昔は『ライト抱っこ』ってリィがねだってきたのに」
「子供の頃の話でしょうが！」

嫌がる幼女と、目を細めて嬉しそうにリィナを見ながら決して離さないライトのやり取りに、その場の全員が心の中で大きくため息をついた。

朝、ライトがリィナを子供抱っこして登場した時からずっと、二人は注目の的だった。
リィナが幼女の姿、というのもあるが何より注目を浴び続けるのはライトの態度だ。

学年も違うのにライトはリィナを自分の教室まで連れてきて膝上に座らせた。
以来片時も離さない。

そして件の会話。

注目するな、というのが無理な話だ。

「もぉ！いい加減離してよ！バカライト！」

癇癪（かんしゃく）を起こしたリィナの叫びに、ライトはにっこり笑って飄々（ひょうひょう）と返した。

「駄目だよ。こんな可愛いリィナから目を離したら怖いヒトサライに拐われちゃうからね」

「が、学院にヒトサライが出るかー！！」

アホか～！と大激怒したリィナに大真面目な表情を向けてライトは言った。

「僕の可愛いリィナに触れようとする奴は全員ヒトサライだから付いていっちゃ駄目だよ？」

「誰がライトのよっ！そういう事は妹じゃなく彼女作って彼女にしてちょうだい！私を巻き込むな～！！」

「何言ってるんだい。彼女がいたとしてもリィナ構うのは変わらないよ？」

「変わってよ！」

リィナの渾身のツッコミにその場のライト以外の全員が同調した。

本日何度目になるか考えるのも放棄した位繰り返された同調の瞬間だった。

類友でした…ｏｒｚ（前書き）

短いですが続きです（、∇、ゞ

類友でした…ｏｒｚ

「このバカ兄なんとかして」
「無駄だ」

フォルテの姿を見た瞬間、リィナは反射的に訴えたが、フォルテは無表情のままさっくりと切り捨てた。

「即答！？ちょっと位考えようよ！」
「無駄だ」

リィナのツッコミもこれまた即答で撃沈し、フォルテはライトに向かって口を開いた。
リィナが涙目で睨み上げているのにも頓着しない。

「セルゲイ師の呼び出し。今すぐ行け」
えぇ～、と嫌そうに声を上げたライトは、それでも呼び出しに応じる為に渋々立ち上がった。

「リィナは置いていけ」

当然のようにリィナを抱えたまま気乗りしない様子で歩き出そうとしたライトを、フォルテは言葉で止めた。
それに更に嫌そうに盛大に眉をしかめたが、ライトは自分の椅子にリィナをそっと座らせた。
そしてリィナの目線に合わせるように床に膝をついてリィナを見つめた。

「リィ？良い子でお留守番出来るかな？」

「…ッ！とっとと行け！」

リィナは思わず握り締めた右手をライトの顔面目掛けて繰り出した。

∞∞∞∞

あっさりと。

あっさりとリィナの拳をかわしたライトは、淋しがらなくてもすぐに帰って来るからね、と勘違いした寝言をほざ…いやいや。言いながら名残惜しそうに何度も心配そうに振り返りながら教室から出ていった。

リィナは膨れっ面でそっぽを向いてライトを見ようともしなかった。

「…誰かホントなんとかしてくれないなか、あのバカ兄」

呻くようにぽつりと漏らしたリィナの言葉に、フォルテは無言で目線を向けた。

目が無駄だと雄弁に語っていた。

そんなフォルテの様子にリィナは盛大に眉をしかめた。

その様子は先程のライトの様子と良く似ており、二人の血の繋がりを感じさせるものだった。

容姿も似通っている二人だからその点だけでも確かな繋がりは解るのだが。

「様子見なんて悠長な事してたら胃に穴が開くわ」

勢いをつけて椅子から飛び降りると、リィナは憤然とした様子で歩き出そうとした。

「実験室？」
「…私が分かりやすいのかフォルテの頭の回転が早いのか悩むとこよね」
苦笑しながらフォルテを見上げて言うリィナに、僅かに面白そうな表情を浮かべてフォルテは言った。
「両方」
「悪かったわね、単純でっ」
可笑しそうに言うフォルテを睨みながらリィナがかみついた。
が、それに頓着せず面白そうな表情をしたままフォルテはマイペースに告げた。
「面白いから別に」
「…ライトの友達よね」
その言葉に心底ゲンナリした様子でリィナは呟いた。

急転直下過ぎだし

「っきゃあぁっ」

何時かの再現のようにその部屋から悲鳴が上がった。

∞∞∞∞

フォルテに抱え上げられたリィナは不機嫌そうな様子を隠すこと無く周囲に撒き散らしていた。

「何でフォルテにまで子供抱っこ…うぅぅ…」
「遅いから」
「歩幅が違うんだから仕方ないでしょ！」
「抱えた方が早い」
「実利一辺倒な発言すぎ」
「当然だ」
「……どこまでも本当にライトの友達よね」

何なのよその傍若無人なマイペースさ加減はさぁ…
ぶちぶちと肩口で呟くリィナに無言で面白そうに視線を向けると、直ぐに無表情に戻り前を向いた。
目指す部屋に辿り着き、フォルテはリィナを抱えていない方の手でドアを開くとリィナを降ろした。

「ありがと、フォルテ」

その言葉にフォルテは片眉を器用に上げて答えた。
何だかんだ言いながらもリィナはこんな時素直にお礼を口にする。
たまに恥ずかしいのかそっぽを向きながら言い捨てるような態度の時も有るが、基本は目を見て礼を言う。
それを見ると、フォルテは何時も複雑な気分になる。

リィナのそれは本人の気質にも依るのだろうが、ライトの影響が大きい。
憤慨したり、邪険にしても結局リィナにとってライトが『特別』だという証のようで。
微笑ましいような、可愛らしいような…けれど微かに不快感も抱く。
人付き合いが苦手な自分と比べて羨ましいと言う感情も有るし、そうやって素直な感情を向けて来ることを嬉しいとも思うし。
複雑過ぎる上、全ての感情を自覚しきれていないフォルテは考える事を放棄した。
何れ、解るときも来るだろうし、焦ってもいない。

ちょこまかと動くリィナを見ながら無表情の裏でフォルテはぼんやりとそんな事を考えていた。

∞∞∞∞

リィナは器具や材料を手際良く使いやすいように並べていた。
実験は好きだ。

どんな実験をしようかあれこれ思索するのも好きだが、無心に作業に没頭しているこの時間はリィナにとって大切な時間だ。

無心で向き合う事によって新たな視点が得られる事もある。
何時もより勘も鋭くなるようだ。
先ずは調合だ、と手間の薬草を手に取った瞬間、目の端を何かが過ったような気がした。

「……ッ！」

リィナが反応するより早く、後ろから力強い腕で引き寄せられ、気付くと離れた場所で腕に抱き抱えられながら座り込んでいた。

「フォ…テ？」
「怪我無いか？」

至極冷静なフォルテの言葉にリィナは混乱しながらも自分の身体を見下ろす。
見えるところに異変はない…と思う。

「…た、ぶん？」

半ば呆然としながら律儀に返答するリィナに視線を合わせて、安心させるように一つ頷くと、フォルテは腕の拘束を解いてリィナの前に回った。

眼前には散乱した器具や材料があった。
幸い壊れた器具は無いようだが、辺りは大風に吹き飛ばされたような惨状だった。
そうして、風が発生したと推測される場所に子供が一人、こちらを睨み据えて立っていた。

「シーリン…」

呆然としたままのリィナがぽつり、と呟くと、子供がリィナを見て叫んだ。

「ずるいぞ！お前！」

「…は？」

地団駄を踏みながら叫ぶと癇癪を起こしたように力を振るった。

「っきゃあぁっ」

自分達に向かって来る突風に、リィナは驚いて悲鳴を上げた。

急転直下過ぎだし（後書き）

こんなとこで区切ってすみませんm（＿＿）m

終わった気がしません…（前書き）

お待たせ致しましたm（＿＿）m
一応リィナおちびになる、の巻は終幕です。

終わった気がしません…

シーリン。
それは精霊の総称。

世界が夢見た時代に生まれ出でた原初のイノチ。
混沌の気が凝(ここ)った末に顕(あらわ)れたモノ。
混沌が支配する空間より現れた彼らは混じり、離れ、溶け合い、消し合い、
さまざまな命を作り出した。

限界まで凝らせ、混じり合った末に血肉を纏ったモノ。
離れ、互いを消し合った末に純粋な気の固まりを纏ったモノ。

前者は血肉を糧とし、他者の血肉で己の血肉を補う。
後者は世界を糧とし、世界に満ちる気を貪る。

世界が固定され、存在が固定された時、それらは『ヒト』となった。
『ケモノ』となった。
そして、それらは『シーリン』となった。
火が『火』と呼ばれたように。
水が『水』と呼ばれたように。

対極のようでいてその実、表裏の如く一身の存在として世界に放たれた、
混沌から生じたイノチ。
だからこそ。
世界は混じり合う。

何処かの世界の思想にあるように、火は究極の一つの元素ではない。
『火』の裡(うち)には、闇も光も風も…そして対極と言われる水さえも
内包しており、分かつ事は、最早不可能。

なぜなら、ソレは『火』と名づけられてしまったから。
名づけられたモノを変える事は、無に帰す事以外不可能。

それがこの世界の理(ことわり)。
存在しているイノチが、理解している理。

ただ一つ。
世界だけが理解している理も存在する。

世界はイノチ全てを糧とし、死した魂は世界に喰らわれる。
記憶を、知識を絞り取られた残り滓が再び魂を構成してイノチを纏う。
そうして世界は成長していく。
いつか。目覚める為に。

∞∞∞∞∞∞

思わずギュッと瞳を閉じて体を強張らせたリィナだったが、数秒経っても
衝撃が無い事に恐る恐る瞳を開いた。

「……ライト？」

自分の目の前に庇う様に立っているいる筈の無い存在を見つけて呆

然と呼びかけた。
その呼びかけに振り返ったライトはにっこりと笑いながらリィナに手を差し伸べた。

「立てる？リィ」
「あ、…うん」

頭に疑問符を浮かべたままだったが素直にその手を取って立ち上がるリィナに、
ライトは更に笑顔を向けて口を開いた。

「お姫様のピンチに登場するのは騎士の役目だからね」
「……要するに探知結界と転移呪印仕込んでた訳ね」
「これが何の防御も無く人お前を一人にする訳がない」

リィナの疲れを滲ませた言葉をフォルテが若干同情を含んだような声音で、しかし
ばっさり切り捨てた。
これ、呼ばわりされたライトは「良く解ってるね」とにこにこと返した。

探知結界。
その名の通り、結界を張った人物の動向を術者が感知し危険を知らせるモノ。

そう言えば先週の結界の講義で張り方を習ったな、と現実逃避気味にリィナは思い出す。
フォルテとライトは2学年上だから応用編も叩き込まれている事だろう。
この世界では魔術も操気術も誰でも使える。

有るのは努力の有無と資質。
混沌から生じた世界故に、属性などは存在せず風も火も水も、世界に存在する現象全て
魔術で操る事は、出来る。
ただし、その魂に含まれる含有率によって多少使い易い、使い難いは存在する。
この学園で一通りの知識を学び、各々の好みも合わせて何を生業にして行くかを卒業する
までに決める。

リィナは在学半ばにして既に薬師としての地位も確立している。
ライトとフォルテは騎士を目指している…のかもしれないが、そういえば進路を聞いてい
ないとリィナはこっそり思う。
ただ、講義の取り方を見ていると剣術の実践訓練などに重きを置いているようなので、
そちら方面の生業に就くのだろう、と見当を付けている。

そこまで現実逃避した頭で考えて、はたと我に帰った。

そう言えば、さっきシーリンに攻撃された、んだった。けど、何か静か？

現状を思い出して慌ててシーリンに目を向けると、シーリンは魔術で全身をぐるぐるに拘束
されて蓑虫状態で横倒しになっていた。
むーむーと涙目で唸りながらもぞもぞと動いている。

「うわぁー…」

哀れなその姿に思わず、声を漏らすと、フォルテと小声で何かを話していたライトがリィナに顔を向けた。

「リィ。こいつどうする？」
「え？」
「消しても良い？」

フォルは止めろって言うんだけどさ、と軽い口調で言ったライトにリィナは驚いて口を開いた。

「消す！？」
「うん。だってリィに危害を加えようとしたんだ。当然だろ？」
「いやいやいや、当然じゃないし、消すまで酷い事してないよね！？」
「リィは優しいね。リィに何かしようとした時点で存在すら消去するのは当たり前じゃないか」
「当たり前じゃないから！ちょっとそれ行き過ぎだから！！」

爽やかな笑顔できっぱりと言い切ったライトにリィナは思わず全力で反論した。
そしてその勢いでシーリンの方へ駆けだすと、彼の口の部分の拘束を緩めた。
魔術の締め付けが半端では無い事に気づいた為だ。

「ちょっと君、大丈夫？」
「だ、だいじょ…近寄るな！」

素直にお礼を言いかけた少年は、うっすら頬を赤くしてそっぽを向いた。

「ふぅん？助けて貰ったリィにそんな態度取るんだ？」
「ちょっ…やめてライト！！」

にっこりと瞳だけ冷たい笑顔を張り付けたライトが瞬間移動の如き素早さで移動してきたかと思うと、笑顔のまま少年を踏み潰した。
ぐえ、と踏みつぶされた蛙のような呻き声を上げたシーリンの様子に驚いてリィナが抗議の声を上げると、渋々ライトは足をどけた。

「大丈夫？生きてる？」
「リィナに暴言を吐いたんだから死刑にしても足りない位だよー全く」

後ろで物騒な事をぼやくライトを無視して慌ててシーリンの上半身を抱えて踏まれた個所を手で確認する。
そうしながらちらり、とフォルテに視線を向けると、フォルテは一度微かに頭を頷かせた。

「だ、大丈夫だから放せ！！」
「んー大丈夫そうね。で、何で『ずるい』のか教えてくれる？」
「…放せ！！」
「教えてくれたら放すよ～？」
「うぅ…ずるい」
「うん。何がずるいの？」

努めて優しく柔らかく諭すような声でそう問いかけると、真っ赤になったシーリンが床に視線

をやったままうぅぅと小さく唸る。
ゆっくりとあやす様に少年の背中を小さく叩いて待っていると、シーリンが思い余ったように
口を開いた。

「ずるいんだ！」
「うん」
「ずるい！何時も結界がある」
「うん？」
「結界はあるし、こいつが居るし、ずるい！！」
「んんん？」
「ずるいぞ！お前！！そんなの有ったら近づけない！」
「は？」

けっかい？ちかづく？
言われた言葉の意味が理解できずに数秒呆然としていたら、自力で
拘束を解いたらしい
シーリンはリィナの緩んだ腕を振りほどき、「ずるいんだからな！」
と叫んで姿を消した。

……はぁ？

全くもってシーリンの行動の理由が分からないリィナは、そのまま
の姿勢で首を傾げた。

「…あの餓鬼。殺して良いよね？ていうか次見つけたら即座にコロス」

フォルテに後ろから羽交い絞めにされたままライトはぶつぶつと笑顔でそんな事を呟き。
フォルテはそんな彼らを見ながら胸中で盛大な溜息を一つついた。

リィナは直ぐに元の姿に戻るだろう…が。
平和で穏やかな日常は何所にあるのだろうか？

そう問わずにはいられない現状だった。

だって楽しいからね。（前書き）

間が相手すみません…

だって楽しいからね。

「そうだ。薬草採りに行こう」

どこをどうしたらその結論に辿り着く？

不意に落とされた一人言に、ライトは内心でそう突っ込みを入れた。

「リィは本当に面白いね」

思考回路が。

内心でこっそりつけ加えて、人の良さそうな笑顔でライトは言った。

先程からリィナの言動を視界の隅に入れていたが、さっぱり理解出来ない。

リィナは先程己の爪を見詰めて、「伸びてるから切らなきゃ」と呟き、爪切りを探しだした。

そして棚を漁っていたかと思ったら、徐（おもむろ）にそう宣言したのだ。

本当にどんな思考回路を辿ったのか気になる。

少女の言動といい、行動といい、端から見ていて予測がつかない事が良くある。

一応一般常識と呼ばれるものは持ち合わせているし、曲がりなりにも学園に所属しているのだから集団行動も対応出来る。

それ故、大抵は予測の範囲内の反応を返す。

それはそれで愉快な反応ではあり、見ていて飽きない。

けれどたまに予測の斜め上の言動をする少女はそれ以上に面白い。

それに少女は感情がストレートに外に出る。

喜怒哀楽のはっきりしたその表情を見るのも面白い。
だから、ライトはついついリィナにちょっかいをだしてしまう。
勿論、口にする言葉に嘘はない。方便は使うが。
リィナが可愛いと思うのも、本当だ。
自分以外でリィナにちょっかいだす存在は消えれば良いと、素で思う。
シスコン上等。とライトはそう思う。
だってその方がリィナを存分にからかえるのだから。

若干どころか大分黒い思考を展開しながら、けれど表面上はにっこりと裏など全くないような良い笑顔でライトはリィナを見つめた。
途端、リィナが不振そうに軽く眉をしかめた。
条件反射のその反応に、内心苦笑をもらしながらライトは表情はそのままに、口を開いた。

「リィってば、そんな顔しても可愛いね」
「…っ」

リィナはその言葉に心底嫌そうにげんなりとした表情を浮かべて、無言で居間を出ようとライトに背を向け扉に向かった。
反応を返すからいけないんだ、よしスルーだ。スルーしよう。

そんな少女の内心の呟きが聞こえてくるような分かりやすい反応に、ライトの笑みが深まる。
その瞬間、不穏な気配を感じたかのようにびくり、と動きを止めてリィナが振り返った。
その顔には警戒心が溢れ出るほど浮かんでいて、ライトは更ににっこりと笑った。
生来の感の良さか、それとも物心つく前から側に居るからか、他人なら分かる筈の無い己の笑顔の違いに敏感に気付くリィナに嬉しくなる。

「どうしたの、僕のリィ？」

普段なら、誰がライトのよ！？と鼻息も荒く噛み付くように反論されるのだが、今回のリィナは、ライトの様子に頬を引きつらせながら用心深く口を開いた。

「い、いいえ。な、んでもない、わ」
「何だか顔色が悪いよ、リィ？風邪でも引いたかい？ああ、大変だ！今すぐベッドで横になならなきゃ、安静にしてないと駄目だよリィ。僕がずっと付きっきりで看病してあげるからね、僕のリィ。大丈夫。寂しく何て無いからね」

不自然な区切り方でぎこちなく喋るリィナを面白そうに見つめていたライトだったが、何とかリィナがしゃべり終えると、早口で畳み掛けるように一息にまくし立てながらリィナに歩みより、腕一本でリィナを子供だっこの要領で抱えあげた。

「何するのよ！」

ライトの素早い動きに対応しきれず、抵抗もせず抱えあげられたリィナは一拍遅れて非難の声をあげた。

「さぁ、ベッドまで抱っこしてあげるからちゃんと大人しく寝てようね、僕のリィ？」

にっこりと擬音が聞こえそうな程完璧な笑みを浮かべながらライトは優しく小さな子供を諭すような口調で返した。
リィナは怒気を堪え、普段より低い押さえた声音で感情を押さえ込むかのように殊更ゆっくりと喋りだした。

「ねぇ、ライト？貴方の妹の頼み、聞いてくれる、かしら？」
「可愛い僕のリィの頼みを僕が聞かないことなんて無いだろう？」
「聞いてな…っ…い、いえ、そうね。可愛い妹の頼みだもの。聞いてくれるわよね」

けろりと告げたライトの言葉につい反応しかけたが、何とか堪えリィナは最後まで言い切った。

「ねぇ、私元気なの。別に風邪もひいてないわ。健康だし今日は休日だし天気も良いし、在庫も補充したいから、薬草採りに行きたい

の」
「うん。良いんじゃない？」
「だから寝てなく…っえ？そ、そうよね。良いわよね！じゃあ…」
行ってくるね。
そう続けようとしたリィナの言葉に被せるようにライトは素早く言った。

「僕も付いていくよ？1人じゃ危ないからね」

楽しそうに言うと、ライトはリィナを抱えたまま歩きだした。
その際、部屋のすみに常備している装備を手に取るのも忘れない。
その装備はライトのものだったが、採取するために必要なものは揃っている。

「離してよ！私の荷物！」
「リィナの装備は、僕がいるから必要ないでしょ」
「必要よ！何勝手な事言ってるのよ！？降ろしてよ！」
「だーめ。危険だからこのまま行くの」
「高々そこの裏山に薬草採りに行くのに何処に危険が有るのよ！」
「足場良くないし、リィが転んだら危ないでしょ」
「何処のコドモ！？」
「リィは危なっかしくて僕は何時も心配なんだよ？」
「だから何処のコドモよ！私は幼児じゃないんだからね！一人で行くんだから離してよ！」

怒りで頬を染めたリィナの様子を内心面白く眺めながら、ライトは心底心配そうな表情で言い募った。

「昨日寝ぼけて階段踏み外しかけたでしょ？無理して抱えた荷物で前が見えなくてぶつかって荷物散らばった事もあったよね？ついでにこの間何もない廊下で転けてたでしょ？」

「……ぅぅ」

言い返せないリィナはひくり、と頬をひきつらせ、悔しそうに唸りながらライトを睨み付けた。

羞恥で頬が染まったままライトを睨み付けるその様は、どこのお約束かと問わずにいられない位、可愛いとしか言い様の無い表情で、ライトは満足そうに笑った。

「さ、明るい内に帰ってきたいからさっさと出かけようね」

「……片腕で抱えあげて歩けるとか、おかしいわよ」

「ちっちゃくなったリィ抱っこしたのが楽しかったからね。クセになっちゃったかな」

悔し紛れに毒づいた小さな言葉に、ライトはにっこりと爽やかな笑顔を浮かべて返答し、今度こそリィナは言葉も出ず撃沈した。

もうやだこのシスコン…。

求む！条件（極狭）に叶うヒト！…真剣なんだけどなぁ～（前書き）

長らく間が空いてしまいました…ナニモイエナイ

求む！条件（極狭）に叶うヒト！…真剣なんだけどなぁ～

自覚させてから折るべきか。先に摘んどくか。それが問題だ。

目の前の会話を静かに見つめながら、ライトはそんな事をぼんやりと考えていた。
彼の目の前では、今まで同じ講義を受けていた二人が、出された課題について激論を交わしていた。

「だから対比はリュウの種子とサットヴァで１１：２６の割合を崩したらこの後の分離で上手くいかないわよ？」
「でもその対比じゃ錫も鉛も触媒に使えないぞ？」
「触媒はそれだけじゃないでしょう？何でそこでティンクトラ使っちゃダメなのよ！？」
「教材には錫か鉛の触媒の記載しかないだろう」
「教材の記載は必要最小限で応用出来なきゃ意味ないのよ？」
「教材にあるもののみで最高ランクを造る方が制約があって楽しいじゃないか」
「そんな拘り１人で作業する時だけにしてちょうだい！」

普通に作るのはつまらない、という何とも自信に満ちた返答にライトは内心で苦笑した。
まぁ、確かに優秀なヤツだから出来るだろうが、変人ぶりが伺えるな、と思いながら彼らの激論を見守った。
彼らの会話は専門用語が飛び交い、講義をとってない人間には付いていけない。

何となく分かる範囲で判断するにルベドというものを作るという課題が出たらしい。
その作業をマグヌス・オプス（大いなる作業）というらしいが…素人にはついていけない世界だ。
『錬金』というのだから、最終目的は恐らく太陽の花を作る事だろうが、全くもって素人にはさっぱりだ。

激論を交わして入るが、彼らの雰囲気は楽しそうで、リィナは本当に調合という作業が好きなんだろうな、と思わせる雰囲気だ。
一人でやれ、と言いながらも彼の出すあれこれな拘りに簡単な実験を繰り返しながら合理的に判断して折り合いをつけようとしている。
実験室で行っていた講義が終わった後、そのまま議論に流れ込んだから、機材は揃っている。

一方の彼は調合も確かに好きなんだろうからそれもあるが、楽しそうなその理由はそれだけではないことが見てとれる。殆どの人が気付かないだろうが、アレは半分はリィナをからかう為にしているのだろうと、次々と無理難題を口にする彼を見ながらライトは確信する。

まぁ、あの反応は面白いからね、と身に覚えのたっぷりとあるライトは思う。
そうして、本人も無自覚だろう、彼がリィナをからかう理由も正確に把握している彼は、さてどうしようか、と思考を巡らせた。

最終的にリィナにちょっかいをかける害虫を駆除するのは変わらない。
重要なのは自分がいかに楽しめるか、だとライトは内心で思う。

フォルテは自覚させてから折った方が楽しいから放置している。
あのシーリンは、現時点で対応を保留中だ。
徹底的に駆除するか、ある程度遊ぶか。
他のシーリン達の対応も見た上で決めようと思ってはいる、が、基本排除。
周辺を若干うろちょろしているが、あれからリィには一切近付けさせないでいる。
それ以外の輩は楽しくも何ともないので即、徹底的に駆除している。

さて。
この彼は自分を楽しませてくれるのだろうか。

ライトがそんな事を考えながら、表面上は爽やかな、微笑ましいものを見つめるような表情で密やかに彼女達を観察していると、突然リィナが焦った様子でライトを振り返った。
相変わらず良い感だ、と思いながら、ライトはにこやかにリィナに問いかけた。

「どうしたの、リィ？」
「…や、何か今背中ぞわっと…な、何でもないわ！うん。何でもない」
「変なやつだなー」

リィナはひきつった表情でごまかすように首を横に降りながら否定した。
そんなリィナを見て、からかうように変人（確定）がそう言ったが、リィナはそれに反応せず、疲れたようなため息を一つついた。

「このまま議論しててもらちが明かないわ。先ずは明日までにお互い構想の概略を考えましょう？というか、こだわりを全て挙げてきてくれるかしら、フロウ？」

あなたのこだわりを一々聞く気力が無くなったわ。

とぼそりと口のなかで続けたリィナは、先に行くわ、と二人に背を向けながら言葉を放り投げると、そそくさと逃げるように歩き出した。

「え？ちょ、リィナ！？」

変人（確定）が、若干慌てて声を掛け、追いかけようと立ち上がりかけたが、ライトがその前に彼の額を押さえて止めた。
のんびりとした力ない動作に見えたが、彼が焦って立ち上がろうとしても全く動けなかった。

「これ、コツがあってね。例えば非力なリィナがやったとしても立ち上がれないから」

にこやかに言うライトを、彼は不機嫌な感情を隠すことなく睨み付けた。

「離せ」

「うん。僕の言いたいことが終わったらね」

払いのければ良いのに気付かないのかな、案外抜けてるな、と辛辣な事を胸中で呟きながらライトはにこやかな表情のまま続けた。

「空気読もうね」

「……はぁ？っつ！」

一言で言いたい事を要約して告げると、一瞬だけ力を込めて頭をわし掴むと、手を離して歩き出した。

振り返らずヒラヒラと手を降りながら、じゃあね～と能天気な挨拶をするライトを数秒呆然と見送った変人（確定）だったが、はっと我に返り、なにするんだ！と声を荒げたが、その数秒で既にライトは視界から消えており、端から見ると間抜け以外の何者でもなかった。

斯くして、ライトの興味をそそらなかった彼は、即座に駆逐された。

後にフォルテに顛末を語り、皆骨なさすぎてつまらない、と締め括り、彼を盛大に呆れさせたのはまた、別の話。

閑話。害虫駆除は必須スキルだからね。（前書き）

時間的には一話目と二話目の間くらい。のライト君。

閑話。害虫駆除は必須スキルだからね。

「おまえ！ずるいぞ！」
「リィに害虫を近づけるわけないでしょ」

突然降ってきた言葉に驚くことなく、ライトは飄々（ひょうひょう）と返答しながら、声のした方に視線を向けた。
気配を消して近付いたならともかく、駄々漏れの気配で近寄って来られたのだから、驚く方が難しい。

年の頃、４、５才…縮んだリィナと似たような年格好の少年が、苛立った表情でライトを睨んでいた。
柔らかそうな白銀の髪と、幼児らしいぷくぷくとしたまぁるいすべらかな頬をもった幼児に近い少年の苛立ちの表情は、怖いどころか、思わず頬を緩めてしまいそうな愛らしさではあった。
けれども、それらは全て半透明で、肉を纏わないその姿は空間に映し出された精巧な像のようだった。
ヒトに似て非なる存在だと、改めて実感する。

リィナの悲鳴が聞こえた瞬間、ライトは彼女の周辺にあった気配を全て吹き飛ばした。
ついでに、吹き飛ばした存在が近付けないように対策済みでもある。
お互い視界には入っていなかったが、シーリンは誰がやったか理解したのでこうやって抗議しに来たのだろう。
…いや。このシーリンが誰がやったか感知出来るか、と言われると微妙なものがある。他のシーリンから事前に聞いていた、のかも知れないな、とライトはかなり失礼な事を考えながらシーリンに向き合っていた。

「害虫じゃない！お前なんかに僕は負けないんだからな！」
「吹き飛ばされて言う台詞じゃないよね」
「うぅうるさい！うるさい！ちょっと油断しただけだ！」
「うーん…コドモに付き合ってる暇はちょっとないんだよね、僕も」

悠然としたライトの様子に、シーリンは悔し紛れにわめき散らすが、ライトは歯牙にもかけず呆れた声で返した。
それに更に激昂したシーリンは、ライトに指を突きつけながら、叫んだ。

「お、お前が出来るのは僕を吹き飛ばすだけだけど、僕はお前を殺せるんだからな！僕の方が強いんだ！」
「また吹き飛ばされたいんだね」

気付かなくてごめんね、とにっこりと笑いながら、吹き飛ばすべく力を右手に込めた。
条件反射のようにシーリンが身を竦(すく)めた。
シーリンの瞳が涙目になっているのも見てとれる。

「教えておいてあげるよ。僕はシーリンを消せる。存在を塵一つ残さず、ね」
「ウソだ！ただのヒトに消せる訳がな……え？なんでお前、そのけ…」

何かに気付いたように、驚愕に目を見開いたまま何かを言いかけたシーリンを容赦なく吹き飛ばして、ライトは小さく口元だけで笑いながらぽつり、と呟いた。

「出来るんだよ、僕は」

知る覚悟は、あるかい？

「いい加減妹離れしないのか」

その言葉にライトは面白がるように口の端をにっと上げた。

※※※

その日、何時ものように二人以外誰もいない空き教室で次の講義までの空き時間を潰していた。
どこかに行くには時間が中途半端な時、そして他人の視線が煩わしいとき、二人はそれぞれ静かな空間を探した。
が。静かな空間というのは以外に少ない。
それだけ学院にヒトが多い、という事ではあるが、別々に行動していても目的地が被る事が多く、お互い干渉するような性格ではないから妥協してこうなった。
今では二人が同じ時間に空いている場合は、誰も居ない場所でお互い干渉しあわずに過ごしている。

もともと寡黙で他人を寄せ付けないフォルテはもとよりだが、ライトにも他人を寄せ付けない部分がある。
その社交的な雰囲気に騙されうっかり踏み込みすぎた人間は本人すら気付かない内に遠ざけられた。
彼が真実受け入れているのはリィナしかいない。
そしてその事を知っているのは、恐らく本人であるライトとリィナ、それからフォルテ位だろう。

フォルテは二人と関わるようになって程無くの頃に目敏く気付いたが、それを口に出すことなく流した。
フォルテにとって気付いたからといって興味を覚えるものでも、騒ぐほどでもなかったからだ。
そしてそれをライトも気付いて内心面白がっていた。
フォルテは『自分も同じだから』気付いたのだと思っているようだったが、どんな感情であれ、ライトの内心の感情に気付ける人間は殆どいない。

同じタイプは他にもいるが、彼らは全く気付いていないし、例えば彼らがフォルテと同じ条件、同じ立ち位置だったとしても気付かないだろう。

それほど己の精神制御が上手い、というのも有るには有るが、それだけではない理由がライトにはあった。

だから、フォルテはライトにとって色々な意味で『面白い』人間だった。
そんなフォルテが何を思ったか、不意にした質問に、ライトは興味を覚えた。
今まで口にすらしなかった質問をした、その意図に。

「どうして？」

どうしてそんな事を聞く？しかも今更？
どうして僕がリィナから離れなきゃいけない？

そんな意図をまとめて一言で問い返した。
フォルテは感情を窺わせない瞳でライトをしっかりと見据えながら、ゆっくりと口を開いた。

「シーリン」
「あはははは。なるほどそういう意味か。うん。離れる理由が無いね」

端的な一言を読み取って、ライトは盛大に笑い出した。
シーリンは本来ヒトの前に姿を顕(あらわ)さない。
漂い、消滅するだけの存在。
世界を糧とし、世界に喰らわれる、モノ。
ヒトから溢れた過剰な力を糧とするが故に、ヒトに近付かない存在。
近付いてしまえば、己の器以上の力を取り込みかねないから。
取り込んでしまえば、壊れるのが世界の理(ことわり)。
わざわざ自殺のような真似をするシーリンは居ない、という事だ。

「シーリンの悪戯でリィナが幼児化した時、わざとしつこいほどにリィナを構った」
「うん。周囲のハエを牽制できるし、護衛もできるし、何より僕が楽しいからね。お得だね」

心底楽しそうに相づちをうつライトに静かな視線を向けながら、フォルテは更に口を開く。

「それなのに悪戯で壊された器具が散乱してたあの場所で、リィナが怪我してるか確認する素振りも無かった。何時もはリィナが嫌がるほど構い倒すのに」
「あらら。状況判断は視線だけで事足りた、って解釈もあるけど？」
「お前なら『見た感じないと思うけど』と前置きして確認するだろう？」
「そこまで僕の事を理解しているわけだ？うーん、気持ちは嬉しいけど、僕にはリィナがいるからごめんね」
「一番気になったのがリィナの反応だ」

お互い既に察していることを整理するように1つずつ淡々と答え合わせしていくフォルテの言葉に、ライトはわざとらしく茶化すような発言をするが、フォルテは一切反応せず、マイペースに先を続けた。

「オレが『珍しい』と言ったら驚いていた。お前の態度も含めて不思議だったから気になったんだ。そもそもシーリンが悪戯する時点であり得ない事だしな。彼女にとってはシーリンが傍に居ることは当たり前なんだな」

確信しているようなフォルテの口振りに、ライトはひょい、と軽く肩をすくめた。

「さあね。僕が見てる限りリィの傍にシーリンが居たことは無いからね」
「お前が傍に居るとシーリンを遠ざけられる、という事か」

「あれ？そんな深読みしちゃうんだ。穿ち過ぎるのは判断を誤らせるよ」

どこまでも茶化した物言いを崩さないライトの様子に、フォルテは小さく嘆息した。

「確かにどうとでも取れる状況証拠ばかりだがな。だが、リィナが『シーリンが傍に居る状態』を普通だと思っているのは本人に確認済みだ。彼女にとって、隠すような事では無くて、ただ聞かれないから喋らないだけなんだな」

フォルテの言葉に、ライトは一瞬よりも短い間ではあったが、感情を一切削ぎ落とした瞳でフォルテを射抜いた。
次の瞬間には、にこやかな表情を浮かべてフォルテに向かって口を開いた。

「シーリン…アレらの存在意義を君は知ってるかい？」

その声音は静かだったが、どこか狂気を孕んでいるような、危うい声音だった。
ライトのモノを測るかのような瞳には気付かなかったが、その口調にうすら寒さを覚え、フォルテは目を見張った。

「そうだね。僕は『シスコン』だからリィを構う訳じゃあ、ないよ。

フォルテ。君が気付いたようにね。だから『妹離れ』はしないんだよ」

そうだ。こんな話を知ってるかい？

にこやかにそう問いかけると、ライトは返事を待たずに語りだした。

事実を受け止める覚悟は、あるかい？（前書き）

世界の成り立ち…の神様サイド。
ヒトサイドは後程。

事実を受け止める覚悟は、あるかい？

その昔。
イノチとは生まれるだけのものだった。
イノチには終わりがなかった。
終わりの無いものが際限なく生まれた。
生まれ、続けた。
世界という名の器の許容量を越えて、尚。

どうなるか、解るよね？

そう。溢れて、そして圧迫された。
その苦しさから、『負』が生まれた。

己の領域を確保するために、お互いを喰らい合い、壊し合い、『死』が生まれた。

概念としてではないよ。
全てを憎み、飲み込む『死』という名のイノチが顕(あらわ)れたんだ。
概念が出来たのもこの時だけども。

で、だ。ソレは全てを貪(むさぼ)った。
この世界だけじゃなくて全ての時空間、膜をも壊し去ろうとした。

え？この世界の外には不可視の膜があるだろう？その向こうには別の膜があり、それに包まれる世界があるってのは知ってるよね？
そう。隣接してるけれど、干渉し合う事の無い空間。
次元を越えて把握出来るのは管理者だけなんだけど、『死』の憎悪、

飢餓は凄まじかった。
本来なら感じ取る事すら出来ない筈の『外』を認識し、そして蹂躙(じゅうりん)する程に。
幾つかの世界が『死』に飲み込まれて消え去った。
世界を隔てる膜も失われた。

だから自分達の世界を守る為に、一組の男女がこの世界に降り立った。
その時、この世界は崩壊していた。
大地が辛うじて残っているだけで、後は『死』しか居なかった。
残っていた大地すら、エネルギーのほとんどを失い、枯渇寸前だった。
何にも。何にも無かったんだ。
え？大地が残っていた理由？とりあえずの足場が必要だったからだよ。
それだけ。さすがに飛べなかったみたいだし、飛べたとしてもそれを維持する力を意識して制御し続けるのは面倒じゃない？
その点大地なら重力が縛り付けて勝手に支えてくれるし、使うの体力だけだろう？体力なんて不随意運動だからね。

さて。話を戻すよ。
彼らは管理者だったから、この世界の理(ことわり)に干渉出来た。
能力的にも、精神的にも、『死』と相対しても対抗出来る力を持っていた。
激闘の末、彼らは『死』を封じる事には成功した。
代償は女神の魂。

そう。女神。

お伽噺の死を司る女神。

皮肉なものだね。『死』を封じて、自らも死んだ女が死を司る女神だなんて。

彼女は持てる力全てを使い果たし、魂が粉々に砕け散った。
欠片はこの世界のあらゆる場所に飛び散った。

彼女の身体は、『死』を封じる為に天へと高く高く伸びゆく大木に変じた。
柔らかな暖かい大木の裡(うち)で癒しの眠りについた『死』は、眠りながら徐々にその力を浄化されているんだ。
理をどう変えても、殺すことが出来ないんだ。
少しずつ浄化し、大地に還元するしか無いんだ。

もう一人の管理者も、ぼろぼろだった。
女神がその身を大木に変えた後、彼もまた全ての力を使って、彼女が枯れないように湖を造り、そして僕らを創った。

肉身を纏い、エーテルを取り込んでエネルギーを過剰に吐き出すヒト。
精神だけを纏い、ヒトが吐き出すエネルギーを飲み込むシーリン。

全ては女神の為に。
女神が蘇(よみがえ)る為に。

知ってるよね？
空気の組成成分。窒素と酸素が殆どで、水素とかヘリウムとかある

だろう？
そして教科書にはその他として表記されている中に、クリプトンとかキセノン、そして魔力の源であるエーテルがあるね。
ヒトはこのエーテルを取り込んで魔法を発動する。
発動した際に生まれる余剰エネルギーは、放置すると世界を崩壊させる。
それを補う為にシーリンがいるんだ。

ヒトが吐き出すエネルギーを取り込んで分解してエーテルとして大気に還元する。
還元出来なかった要素が魂に蓄積され、それが満たされた時、シーリンは死ぬんだ。
死した魂は大木に吸収されて浄化に使われる。
そして搾りカスが湖に流れて、そこから新たな供給源…っと失礼。
新たなイノチが生まれるんだよ。

ああ、ちなみにヒトも同様だよ。
生きているうちはエネルギーを造り続け、死んだらシーリン同様その魂が浄化に使われる。

そう。思い付くだろう？男の方は生の神だよ。万物の父神にして太古の昔にその存在の記憶を自ら消し去った名無しの神。
彼は女神しか見ていないんだ。
1が女神で2、3が無いんだよ。
ここに来たのも女神が来たからだし、ついでに女神に荒事を押し付けたヤツラは彼が魂諸とも消し去ったよ。女神は知らないけどね。

これがこの世界の神話。
イノチの存在意義だよ。

謎解きとは呼べない中途半端さは苛立つだけだな。（前書き）

お待たせ致しました。

謎解きとは呼べない中途半端さは苛立つだけだな。

「これが真実だよ？どう？感想は」

そう言って長い1人語りを締め括ったライトは、口元ににこやかな笑みを貼り付けてフォルテを見やった。
フォルテは何度か口を開きかけては閉じるのを繰り返してからやっと意を決したように、ライトを見ながら口を開いた。
珍しく困惑しきった様子を見せるフォルテを面白そうに観察しながらライトは彼の言葉を待つ。

「先ずもって誰も本気にはとらない話だが…お前がからかってるようでもない。真実、と受け取るべきだろうな。お前達に対する謎がまた増えた」
「あれ？納得しちゃうの？こんなふざけた話」
「ふざけてる、が嘘だとは思えない、が正直なところだな」
「ふうん。フォルテってさ。実は騙されやすいタイプ？実はすっごい単純？」
「そう思うか？」
「はは。どうだろうね？ところでここの図書館の禁書、読んだことあるでしょう？確か…『生と死の端境期（はざかいき）』だったかな。学部長の許可印章が鍵になってる奥の閉架書庫の本」
「っ！？…読んだが、どうして？」

良く許可がでたね、とのほほんと続けたライトをぎょっとしたようにみながらフォルテは返答した。

「それ読んでかつある程度飲み込んでないと、こんな話拒絶するだけだからね。間違いだらけの考察でしかないけれど、その発想が浮かんだだけ凄いよ、あの作者」

若干作者に対する興味を覗かせながらライトがそう告げると、フォルテは納得したように頷いた。

件（くだん）の書物は、お伽噺と、そして一部の（酔狂）な神殿関係者しかしらない口伝（生の男神が自らの存在記録を消し去った）を下敷きに考察を繰り広げている。
口伝自体、上層部でしか知り得ない情報だったが、作者は神殿関係者ではない。
正体は明かされていないが、これは確実な話だという。
何でも神殿上層部だけが知るアルス・マグナ（大いなる秘術）を使い、神殿関係者全員を調べあげたらしい。
結果、全員シロ。
情報提供者すら存在しなかったそうだ。
故に、何故作者が口伝を知り得たか、は今もって謎だ。

ついでに作者探しもうやむやに終わった。
さすがに関係者以外には強行手段を取れなかった為だ。

余談ではあるが、件の書物は自費出版のようで一冊しか存在しない。
ある日当時の王の執務室のテーブルにこれ見よがしに置かれていたそうだ。
書痴の気味がある王は目の前の餌にうっかり釣り上げられ、神殿関

係者に議論をふっかけた。
曰く、この説の根拠と推論の正当についてどう思う、と。
神殿関係者達はそれで書物の存在を知り、怒り狂った。
件の書物を廃棄処分しようとしたが、本の形態をしているものを棄てるのはイヤだと王が異を唱え、棄てろ、イヤだの押し問答になった。
低次元の争いに頭を抱えた時の宰相が妥協案を出して終息させたそうだ。

それがこの学院の閉架書庫（鍵付）への保管だった。
それの存在を知るのは学院長と司書のみ。
閲覧の許可を得る為の条件達成はほぼ不可能なものとされた。

王は本が棄てられるのはイヤ。
神殿関係者は本が衆目に晒されるのはイヤ。

妥協点としては妥当だろう。
今では許可を得る条件は当時ほどでは、無いけれども。
というか存在すら、ほぼ知られていない。
認知度は口伝をしる人数より少ないだろう。

「成る程。確かにさっきの話とは随分違うな。それで。何故お前はそんな話を知っている？そしてシーリンがリィナの前に顕（あらわ）れ、更にリィナに『絶対に危害を加えない』とお前が確信するのは何故だ？」

マイナー中のマイナーな情報を知り、かつその真偽も確かめたらしい、酔狂な変人の問いかけに、ライトはにっこりと心底楽しそうに

笑いながら言った。

「全てに答えが得られるなんて思ってないよね？」
「ならば何故お前は俺の見える所でシーリンを近づけさせたんだ？」

知られたくないなら。教えたくないなら。
シーリンを近づけなければよい。
ライトは確かにシーリンを排除出来るのだから。

フォルテの不満そうな表情を可笑しそうに見ながらライトは口を開いた。

「どうして、だと思う？」
考えてご覧。

これ以上はどうあっても聞き出せない、とその態度から理解したフォルテは、不機嫌そうに小さく唸った。

『生と死の端境期』（前書き）

作中でフォルテが読んだとされる書物の中身を書いてみました。
設定情報…に近いでしょうか？

『生と死の端境期』

女神とは、即ち、死の女神の事である。
それ以外に『女神』は存在しない。
お伽噺に唯一その存在が確認されている神である。

巷間(こうかん)に曰く、其(そ)は生の女神で有るとも伝えられている。
だが、その女神を祀(まつ)る神殿は存在しない。
現在存在するのはこの世界の創造神と言われる男神(おがみ)のみである。
神殿に行くと、かの神のご尊顔に出会えるのはよくご存じの事と思う。
頑固そうな髭面の老爺である。
公(おおやけ)には上記の男神しか神と認められていない。

神殿の対外向けの対応は一貫している。
曰く、この世界に於いて神と認められている存在には神殿が必要である。それは太古に神自らそう示されたからで、言い換えれば神殿がない存在は神ではない、と。
また、お伽噺はあくまでもお伽噺であり、真実など欠片も存在しない。
ただの作り話だ、と。

大多数の世間一般の善男善女はその話を素直に信じていることだろう。
お伽噺はただの子供染みた作り話だ、とまともに考えたことはないだろう。
故にここで改めて問おう。

本当にそうだろうか？
お伽噺だと。そう断じてそこで思考を停止して良いのだろうか？

考えて見てほしい。
他の童話や童歌にどのような解釈がついているか。
童歌が単純な歌だと、今や誰が信じようか？

為政者に弓引く事実を。
詳（つまび）らかに出来ない真実を。
誤魔化したい現実を。
柔らかく言葉をすり替えて曖昧にして伝えられてきたのだと、私たちは知っているはずだ。

真実とはどんなに嘘で塗り固めたとしても、否。厚く厚く塗り固めたが故に、いずれ顕（あきら）かになるという性質を持つようだ。

そう。雨垂れが石を穿つように。
秘されている情報がいずれ漏れ出すように。

いや。少し気が急いてしまったようだ。
ここで先ずは手持ちの情報を開示しよう。
それから、私が辿り着いた結論を書き連ねていこうと思う。

実は神殿の上層部のごく一部では、女神の存在を認めているのだ。
神殿は一環して『死の女神』とのみ呼んでいる。
そしてもうひとつ。
秘された神の存在がある。
万物の父神にして太古の昔にその存在の記憶を自ら消し去った名無しの神。

彼が全てを生み出した、と口伝は伝える。

長い年月を経て、この二つの情報が断片的に漏れてお伽噺に昇華したと考える事が自然の成り行きだろう。

だが、何故口伝と神殿の対外説明が違うのだろうか？
何故万物の父神は自らの記憶を消したのだろうか？
『獣』とは何を指してそう言うのだろうか？

イノチが自然発生することがあるかないかは寡聞（かぶん）にして知らないが、『獣』が文字通りの獣を表していないと考える。

『獣』とは、この世界に存在した我々とは別種族のことを指すのではないだろうか。
俗に言う先住民である。
現在の国家が形成される段階で淘汰された種族の総称ではないだろうか。
そして女神と父神は、彼らの神だったのではないだろうか。

そう考えると、色々と辻褄が合うように思える。

何故口伝と神殿の対外説明が違うのだろうか？
何故万物の父神は自らの記憶を消したのだろうか？

それは、父神が我々の神ではないからだ。
記憶を消したのは、父神ではなく我々の祖先であり、『獣の死』＝

種族の滅亡を表しているのではないだろうか。
つまり……

か、勘違いしないでよねっ！（前書き）

男子禁制女子トークの巻です。

か、勘違いしないでよねっ！

お料理の最大の隠し味は愛情、だそうだ。
美味しくなぁれ（はぁと）、と真剣にキモチを込めて作る、のだそうだ。

正直そんなめんどくさいこと日常的にやってられませんが。
たまにやるからそう出来るのであって、毎日やってたら条件反射みたいに考えなくても適当に動いちゃうから無理だと思うのは、私だけ？
というかなんだよ、最後のはぁと！と聞いた瞬間ツッコミが炸裂しましたがね。

…うん。彼氏出来立ての浮かれ鴉が聞いてもいないのにノロケてきた話だしね。
あれ？浮かれ鴉は男性を指すから、女性には使えなかったっけ？…じゃなくて愛情なら愛してるとか大好きじゃなくて良いのかな？
まぁ、でも料理は『美味しい』から良いのか、な？
としたら、ここで何か言いながら揺り潰したら効き目倍増とかあったりする？

「美味しく…ではなくて良くなぁれ？早く効き目出ろ？あれ？でも不味いと飲み辛いから美味しくなぁれ、でも間違ってないよねぇ？」
「主語はどこ！？あたしはあんたの思考回路辿れる能力ないわよ！てかあってもお断りよ！それともでかい一人言？スルーして良いの？あんたの会話の八割はスルーすることになるけど？」
「…？思考回路？どうしてそんな話になるの？」
「ッ！あんたのそーゆーとこホント腹立つわっ！」

がぁっ！と一応年頃の乙女、としてどうかと思う吼(ほ)え声を上げながら、隣で調合していた少女が言い放った。
それを何時もの事だと動じることなくのんびりとリィナは口を開いた。

「良くわかんないけど、とりあえずごめん？」
「解ってないのに謝るな！しかも疑問型とか喧嘩うってんの！？」
「いやぁ～話進むかな、と」
「謝る前に脳内会話の結果だけ口走るのを止めればすむ話でしょーが！気付きなさいよ！」
「う～ん…ムリ？」
「あっさり諦めないでちょーだい！ていうかそのマイペースっぷりあんたたち兄妹そっくりよ！」
「ちょっ…！あの性格破綻者と一緒にしないでよ！」

少女の台詞に、喋りながらも動いていた手を止めリィナは声を荒げた。
慌てたせいで若干擂り鉢の中身が溢れたが、乾燥しきった葉っぱなので良しとしよう、と頭の片隅で妙に冷静に判断する。
そして別の回路であのはた迷惑な存在と一緒にされるなど冗談じゃない、とリィナは思う。
その様子をふんと鼻であしらいながら少女は口を開いた。

「事実じゃない。何だかんだ言いつつ結局あんただってブラコンだし」

「……ぐっ」
「ほら見なさい」

なまじ自覚が有るだけに微妙に言い返せないで詰まるリィナの様子を見ながら、少女は勝ち誇ったように止めを指した。

「うぅぅ〜」

止めを刺されたリィナはぺしゃりと机に懐いて呻(うめ)いた。

「やっぱ私、恋愛とか出来ないかなぁ？」
「色んな意味でムリね！」
「ちょっとは気を使おうよ！即答かつ言い切るとか、ヒドクない？」
「シスコンの兄がいる。ブラコンである。オマケにニブイ。この事実の前に即答出来ない要素がどこにある訳？」
「うぅぅ〜」

あまりのショックに口から魂を半分程吐き出していそうなリィナの様子に、少女は遠慮なく、笑い転げた。
その態度にリィナは机にうつ伏せたまま恨めしそうな視線を向けて剥(むく)れた。

「ビーひどい」
「だって面白いもの！…で？何でそんな話になるのよ？あんた、恋

愛に興味ないでしょう」
「…な、ンデモござイません、よ？」
「ほんっと嘘つくのヘタよね。抑揚も発声もメタメタよ」

はんっ、と軽く鼻で笑ったビーは、実にイイ笑顔でリィナを見た。
その様子にリィナはイヤそうに半身を起こして身を引いた。

「んふふ～。誰かに告白でもされた？」
「ナニソレ、ってか私を好きな物好きいるわけないし！」
「素の発言てのがイタイわよね、刷り込みされた点は同情するけど」

呆れたように返したビーの言葉に条件反射で反論しようとして、リィナはぐっと押し黙った。

今までの数少ない人生経験から鑑(かんが)みても、多分ビーの言葉は正しい、のだと思う。
誰か知らないけれど、そういう風に自分を見るヒトがいる、という事に、リィナは軽く戦(おのの)いた。
誰とも知らぬ相手に知られている、という未知のモノに対する嫌悪感と、とっさにそう思う己の精神の未発達さに、苛立ちに似た気分を覚えて、リィナは別の方向に思考を逸らした。

そして自分に向いた視線に気付いてない、というよりはライトに上手く逸らされて疑わなかったのだ、とリィナは結論付けた。

今でこそ反発し、うっとおしいと思う事甚(はなは)だしいが、リィナは物心つく以前から巧妙にライトに洗脳よろしく刷り込まれたのだ。

乱暴に言ってしまえば、ライトの意思はリィナの意思。
どんなに抵抗したって結局の所最後は、ライトの意思を受け入れて疑問に思う事もない。
傍に居て良いのは、ライトが認めたヒトだけ。
ライトが認めないなら知らない内に遠ざけられて、その事実すら、リィナは気付かない。
今みたいに気付いたとしても。
ライトが遠ざけたなら仕方ない、とそれで済ませてしまうだろう。
寂しく思ったとしても、自分から近寄ったりはしないだろう。
そう、当たり前のように思う自分がいるのを自覚する。
こんなんじゃ、恋愛なんて先ず無理だ。
それ以前の問題だし。

そう。フォルテの事だって…。

「告白された訳じゃないなら、自覚した?離れてみて気付いたキモチ、な〜んてベタな展開だったり?」
「なっ…だっ…じか…?」

まさにある意味『離れてみて気付いたキモチ』について考えていたリィナは、あまりのタイミングの良さに、盛大にどもって慌てた。
ビーは、そんなリィナの様子に一瞬驚いたように目を丸くしたが、次の瞬間には玩具を見つけた肉食獣のような笑みを浮かべた。

「あら、何だか楽しそうな事になりそうね」
じっくり、ゆっくり聞かせて貰おうかしら。

がしりと肩を掴まれて退路を絶たれたリィナの顔はさあっと青ざめた。
何かを盛大に勘違いされた、というのは解ったが、それが何かさっぱり検討もつかないリィナは、回らない頭であわあわと回避策を考えるが、よい案が浮かぶ訳はない。

どうしたものか。
空回りする頭でリィナは逃げ道を探した。

もうヤダ、恋愛って面倒くさい…

あはは。うふふ。
タダイマぴんちでございますよ～
よくわかんないけど大ぴんち。
なにがどうしてこうなった？
責任者出てこい！きっちり説明しやがれ！
ダレか助けやがれ、こんちくしょう。

いやいやいけないわ、私。
女子としてあり得ない言葉遣いはいけないわぁ～

「何か脳内会話してそうだけど逃がさないわよっ！さぁっキリキリ白状なさい」

語尾に音符がついているように楽しそうな声をかけながら、ビーは逃がすものかと、リィナの肩をがっちり掴んで現実逃避しだした彼女を揺さぶった。
異様に楽しそうなビーの態度にリィナは脳内で乾いた笑いを浮かべた。

どこをどう間違ったのか、今までの一連の会話やリィナの態度で、ビーは『リィナはフォルテに好意を抱いている』と認識した、らしい。
好意…えぇ。友人としてなら認めるのも吝(やぶさ)かではありませんとも。
ええありません。ですが、そこに恋愛要素はチリの欠片ほども存在

してませんが！？
まかり間違って将来うっかりそんな要素が発生しちゃう可能性は確かにゼロとは言い切れませんが、少なくとも現時点では全くこれっぽっちもちっとも有りませんよ！勘違いしないで頂きたくっ！

と、ようやく事態を把握したリィナが必死に主張したが、時すでに遅し。
暴走したビーの思考の前にあっさり敗北して現在絶賛現実逃避中だった。

激しく面倒くさい。
あの妹限定空気読まないシスコンのバカ兄といい、己の回りには、はた迷惑なのしか居ないのか、と後ろ向きに自問自答する。
類友、という単語が浮かびそうになり、己の精神安定の為に脳内辞書からさっくり削除したが誰が咎めようか。いいや咎めない。とリィナは現実逃避しながらやさぐれた思考を展開する。

他人事として考えるなら、こんな面白いネタはない。
女子は基本、恋ばなスキーなイキモノだし。
今まで興味を示さなかったのだから余計だ。
ちょっとテンションあがって盛り上がっても、仕方ない事だろう。
それを楽しそうだねぇと生暖かい視線で遠くから見守るだろう。

が。それが己の身に降りかかるなら話は別だ。
甚だ(はなは)しく面倒くさい。
適当に放置したらどこにどんな風に波及するかわからないが、かと

いって今の状態で誤解が解けるか、と問われれば、答えはノーだ。
既に玉砕済みである。
さて、どうしたものか、と内心盛大にため息を付きつつ、他に策もないので、リィナはため息混じりに口を開いた。

「だからねぇ～別に私はフォルテに恋愛感情持ってる訳じゃなくてね…」
「もう！いっくら初恋でその手の経験値なくても気付きなさいよね！アンタのそれは恋愛感情でしょ！？」

…いや、だからどうして本人否定してるのにそこで断定？
どこに断定出来るだけの要素があったと！？

「…もうヤダ。恋愛って面倒くさい…」

あまりのビーの暴走っぷりに疲れはてたリィナはがっくりと肩を落として、そうぽつり、と呟いたのだった。

もうヤダ、恋愛って面倒くさい…（後書き）

この場合面倒くさいのは恋愛ではない、と訂正してくれる存在はもちろんなく。
こうしてまた一歩、にぶにぶ天然街道の深みに足を踏み入れる…かもしれない（笑）

災難は続くよどこまでも…いらないわよっ！

「…あ」

その場に、気不味い空気が流れた。

∞∞∞∞∞

あれから。
表面上は何事もなく、というか起こさせるもんか！という勢いで周囲を警戒していた。
その様子が旗から見たら立派な挙動不審だったことにリィナは気付いていなかったが、とにかく必死だった。
よく考えて見ないでも、ライトと共に居たから接点があったフォルテと遭遇（そうぐう）する機会はそう有るものでは無いし。
ビーはからかっては来るが、手を出したりはしない事をリィナは知っている。
それでも猶（なお）、リィナは過剰に反応することを止められなかった。

だが。
過剰に反応すればするだけ。
見たくない、と思ったら思っただけ。
その対象との縁が強くなるのか、リィナが彼を見かける回数が一段

と増え、更に過剰反応し、発見率を増やすという悪魔のごとき無限ループに陥っていた。
せめてもの救いは、リィナが見かけるだけでフォルテは気づいていないことだろう。
とにかく、回避あるのみ！と内心固く誓ったリィナだったが、この日この時。
遂に彼女が恐れていた『最悪の事態』が訪れたのだった。

∞∞∞∞∞

目の前で立ち止まり、不思議そうにリィナを見下ろすフォルテと、尻餅をついたまま驚いた猫のように彼を見上げて固まるリィナ。

「…あ」

驚きの余り無意識にリィナの唇から1音漏れるが、それが言葉として続く事は無かった。

曲がり角で不意にぶつかる…どこのベタな展開だと、端から見たら野次馬根性を盛大に煽られる状況で、彼らは遭遇してしまった。
身体毎、思考回路を凍結させたリィナの脳裏には『どうしよう』の単語だけがぐるぐると回っていた。

「大丈夫か？」

いつまでも座り込むリィナに不思議そうな表情を浮かべながらフォルテは手を差し出した。
その場の居たたまれなさに今すぐ逃げ出したい衝動に駆られていた少女は、その言葉に弾かれたように勢い良く立ち上がり、脱兎の如く走り去った。

「ごめんなさいっ」

捨て台詞のように残された言葉に、やはりフォルテは不思議そうに小さく首をかしげたのだった。

∞∞∞∞∞

「…あぁもう、何やってんの私」

手近の空き教室に駆け込むと、扉に背を預けてずるずると床に座り込んだ。
逃げてどうする！とリィナは自分を罵る。

フォルテから逃げられても、自分からは逃げられない。
これは愛じゃない。恋でもない。
イヤになるほど幼い感情。

リィナはぎゅっと固く目を閉じて膝を抱えて縮こまった。
自己嫌悪に瞳が潤んだ、その時。
不意に後ろから柔らかい腕にぎゅっと抱き締められた。

「〜〜っ！？」

驚愕の余り、目を見開いてそのままの状態で固まったリィナの耳に、
笑い混じりの声が届いた。

「びっくりした？」
「〜っびーっ」

聞き慣れた声に、リィナは早鐘を打つ心臓を宥めながら扉から少し
背を離して顔だけ振り返った。
リィナの視界に、愉快そうに唇を笑みの形に歪ませているビーの上
半身が写る。
扉を半分すり抜けた状態で抱き着くビーの姿はシュールな光景だっ
た。

そういえば半透明なのになんで感触が有るんだろう？と真っ白にな

った頭の片隅で現実逃避気味に考えていると、ビーは楽しそうに爆弾を投じた。

「逃げちゃうなんてそんなに恥ずかしかったの？」

「〜〜〜っ」

出歯亀されていたことに気付いたリィナはがっくりと脱力したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3236q/

身辺雑記。

2011年12月23日00時47分発行